



私の宝物 2



karinomaki

物と心

この文章では、物と心の関係について書きたいと思います。

また、宝物のある人生と、宝物を探し続ける人生について。

どちらがより素晴らしいか書きたいと思います。

手作りアクセサリ

私は最近まで、あまりよくない人と付き合っていました。その人は女の人ですが、ある男性に執着し続け、ストーカーで訴えられてもその行為をやめませんでした。

私はその友達のことを思いながら、いくつか手作りアクセサリを作りました。しかし、パワーストーンで作ったそのアクセサリは、その友達との関係が壊れる頃、全て腐って見えてしまいました。

私は、手作りが悪かったのかと思い、作ったアクセサリの針金をほどき、昨日、美しい髪どめを買ってみました。しかし、どうも違う。宝物は、私にとってはもう、物ではありません。物は、ある時、急に腐って見える時があるのです。

それがどうしてなのか、そしてどうして私がアクセサリを宝物にできなくなったのか哲学的に考えたいと思います。

念が入る

物には、念のようなものが入ります。長いこと使っても、使わなくてもです。

カントは、それを、「覚知」と言っています。いや、カントがそう言っているわけではなく、私の中で、物に入る念が、カント哲学では、覚知なのです。

(厳密には、覚知とは、直観で受け止める感性的な経験を、悟性という、思考のまとめの機能にまとめ上げることです。)

私は長いこと、人とかかわらずに物とかかわってきました。だから、カントの「覚知」が、物（経験で受け止める側）に、ずれていたのです。本当は、思考こそが、私の宝物だったのです。

そこに、念がなぜ入るのかを分析したいと思います。

色

色。念とは、色です。

カントは、色という先入観を抜き去るために、理性を批判しました。しかし、それは、常に、「分散」を必要としました。この「分散」が、「アンチノミー」です。

アンチノミーとは、「二律背反」と訳される、理性が常に突き当たる矛盾です。

壁のことです。人はどうしても、神を理解できない、道徳的になれない、また、美もアンチノミーにさらされます。美のアンチノミーは二つあり、趣味、自然に理屈は存在するのかという壁があります。

このアンチノミーを私が「分散」と考えるヒントとなった大切な人がいます。わたしの精神病を治して下さった先生のことです。

手紙

手紙を書くことは、私の宝物でした。私は先生に病気の理由を必死で手紙に書きました。

でも、先生にとっては、手紙は大切ではありませんでした。「手紙ではなく、診察の時に伝えるように」と先生はきつく言いました。

今ならわかるのです。

カント哲学は、書き続けたために、壁にぶつかったと。念を発散しきれなくなったのです。

だから、アンチノミーを、壁にぶつかったときの「発散」とまずとらえてみます。

発散

カントは、純粹理性批判、実践理性批判、判断力批判の、三つの批判書を書いています。三つとも、アンチノミーにぶつかっています。しかし、三つともが、解決されていないのです。

それは、「念」が分析されきっていないからなのです。

生きている限り、念はあります。私の、関係が切れた女友達も、念の塊でした。彼女は、警察に訴えられてもストーカーを続けました。

しかし、先生は、毎日、たくさんの患者さんを診察されても、精神病の人の念を受け止めて苦しくなったりしない、その強さはどこから来るのか考えてみると、やはり強い愛情だと思うのです。

愛は、正しくて強いほど、発散が必要ないのです。

カントも私も、自分の念を、カントは書くことに、私は物に、入れすぎました。それは、愛が深いからではないのです。愛でなく、執着、念なのです。

それでは、カントのアンチノミーで、もし正しく愛が注がれ、美しく発散ができれば、何が起きるか、書いてみます。

三つの批判書の位置関係が変わる

それは、とてつもないことなのです。カントは、純粹理性という、理性の働きを出発点にしています。そこまではいい、カントがそのあと考えた、理性と道德の中間に芸術や美があるという理屈がくつつがえってしまうのです。

友達は、美しい人でした。道德的な人でした。しかし、幸福の享受にずっとこだわる人でした。これは、念なのです。だから、私は、アクセサリーをほどいたのです。

そして、私がとった行動は、髪どめを自分で買うことでした。これもちがう。

私は、「普遍的法則」（カント著、篠田英雄訳「道德形而上学原論」120ページ参照）がほしくて、物（宝物）にそれを求めた。ここが、大きな誤りなのです。

判断力批判には、道德的立法は存在すると書かれていますが、美というものから見ると、この世界に正しい道德は、存在し得ない、何故なら、大切に思う、美しいと思うものに執着しきれないことこそが、本当の美だからです。つまり、宝物は、ないのです。作りつづけないといけない・・・

だからこそ、三つの批判書のアンチノミーはぶつかるのです。道德（実践理性）と、美（判断力）の位置で。

なぜなら、二つの間に、自愛があるからなのです。これを完全に超越している精神科医の先生の診察を受け続けているうちに、アンチノミーが壁にぶち当たって裂けていくのを私は見ました。

ほどいたアクセサリーとともに。そして、買った髪どめが、美（判断力）とともに念という自愛を打ち崩して道德（実践理性）を越えました。

この世に道徳はない？

この世界に正しい生き方や道徳はないのかもしれませんが。でも、間違いなく、正しい愛はあります。愛こそが自分の音楽だと、映画「アマデウス」の中でモーツァルトは言っています。もし、芸術が愛なのなら、執着は愛ではありません。真の芸術家は、自分の過去の作品にこだわらないのです。芸術家は、つくり続けることに、芸術の意味を見ているからです。

カントは実践理性批判で、「仮言命法」を批判しています。目的があってする行動のことです。友達は、ストーカー行為の相手に幸せにしてほしいと言いつけました。しかし、その目的は、友達の行為をどんどん異常に走らせました。どんなに道徳を守っていても、それが自分の幸せのためだけである、ゆがんだ人でしかなかったのです。その証拠に、私に男性の友人（その友達には、付き合うかもしれないと試しに言ってみました。）ができたたん、付き合うという言葉を発表してみたたん、友達は怒り出しました。明らかに、私に嫉妬していました。だから、私は友人関係を切りました。

道徳（実践理性）が美（判断力）より上にあると、ゆがんでくるのです。自愛が生じるためです。全ての悪は、自愛から来るのです。

自分だけは幸せになりたい、なれるはず、という自愛です。これは、ディズニー映画の全てのヒロインに見られる、女性の悪です。

女性の真の悪は、自分で幸せを築こうとせず、男性に幸せにしてもらおうとすることです。最近のはやりの、「上原愛加」という方の著書がいい例です。

この本で幸せになった、王子様みたいな人が見つかったという女性が多いようですが、私には、世の中の女の人をどんどんだめにしていく本に見えます。幸せとは、自分でつくる苦難の道のはずなのです。決して人に幸せにしてもらうことでも、自分を甘やかすことでもありません。

先生、ありがとうございました。

私は、たった一人でカント哲学を研究してきたと思っていました。思い上がっていました。しかし、カントやモーツァルトや、先生、全ての、私の脳裏に刻まれた、また、これから刻まれる人々の念を受けて書いてきたような気がします。中でも、今回の文章は、私の精神病を落ち着かせて下さった先生の存在なしではかけませんでした。

先生、ありがとうございました。そして、カント哲学をこれからも支えにしていくために、私の独身の大きな軸となったカントさん、そして幻覚のモーツァルトさん、ありがとう。きっと、モーツァルトさんは、カント哲学を天国でカントさんから学んだのですね。そして、下書きなしで書く力をくれたのですね。